



附属小のマスコット・キャラクターが決まりました！平和で一人一人が輝く学校という願いが込められています！

令和5年度 附属小学校だより

スマイル³ふぞく



第10号 令和6年2月22日（木） 校長 古野 祐一

研究発表会が終わりました！

2月9日（金）に、本校の使命である先進的な研究の発表会を無事に終わることができました。これも前日から清掃作業に参加くださった保護者の皆様、当日の運営に力を尽くしてくださいました評議員の方々、本部役員の皆様のおかげです。参観の先生方から、保護者の皆様のおもてなしに対する御礼の言葉を沢山いただきましたので一部を紹介します。

- ・受付で急な対応をいただき、大変助かりました。控室にも丁寧に案内していただき保護者の方の優しさに感謝いたします。
- ・お弁当を含めて、全体的にとっても温かい発表会でした。保護者の皆様、御準備大変だったと思います。子どもたちのキラキラした笑顔が沢山見られて、実りの多い研究会でした。

本校に関わる全ての人が幸せになっていく学校を目指し、「スマイル附属」という呼称を掲げ取り組んできた道のりは、研究のテーマである「幸せを掴む子ども」を育てる3年間と重なります。

小学校入学時から、「やってみたい」と一歩前へ踏み出す勇氣、何度も挑戦したいという意欲を認め、励まし、伸ばしていく過程で、自信を付ける教育を大切にしてきました。その自信を付ける教育の要が、「自律した学び」のある授業です。子供自らが問いを見つけ、他と協働しながら自分で判断し、選択していくといった学び方の多様性が、各学級の授業から発信されました。子供が主語となる授業を、子供の学びの姿で構想・実践・省察を繰り返し、自律した授業とはこうしたものだ、自分の言葉で語る附属教師たちを誇らしく思いました。

これからも、今、求められている資質能力を身に付け、自分の物語を創っていく子どもたちを応援していく北斗の学び舎であり続けます。

体育館が新しくなりました！

新しくなった体育館に一歩足を踏み入ると、側面がオレンジ系の色合いで明るく、心がウキウキとしてきます。子どもたちが授業で使う跳び箱やマットなど、全てのものが新しくなり、続々と運び込まれています。子どもたちの喜び顔を見るのが楽しみです。

2月27日（火）の児童集会では、集会委員会の子供たちが企画した「体育館お披露目集会」が行われます。改修に携わった方々へ、感謝しながら楽しめる会にしようと頑張ってくれています。



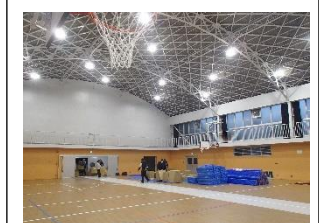
各学級の清掃をしてくださった保護者の皆様。



中学校の体育館で講演会の会場を作る6年生。



中学校の体育館で体育の授業をした5年生。



教具が運び込まれている体育館の様子。

※裏面に続きます！

北斗の感動

2月に入り、4年生の「長崎市役所マルシェ」5年生の「平和公園P E A C E活動」と、立て続けにテレビで紹介されました。子どもの頑張りを知っていただくことで、やりがいの向上につながりました。また、長崎伝統野菜普及、給食甲子園、企業コラボ家庭科授業、福島との遠隔授業など、今年度は、多くの教育活動を新聞やテレビで紹介いただきました。

メディアで取り上げられた理由として、積極的なプレスリリースがあります。その中心にるのが広報戦略リーダーの小畑教諭です。テレビ新聞各社とのつながり方や外部リソースの活用の仕方を職員にレクチャーしています。

職員集団の強み

小畑教諭のように、本校には強みに特化した職員を頼ることで、学びの幅が広がったり、探究が深まったりすることが多くあります。

トランザクティブ・メモリという考え方があります。組織の中で誰が何を知っているかを知り、全員がその情報を共有することで、全体のパフォーマンスが向上する考え方です。本校で言うなら、一人の職員が何を知っているかより、皆の知っているを集めることで、これまで以上に教育活動が充実していくことです。校外に出たり、専門家に来校していただくことが増えた今年度は、うまくこの機能が働き、子どもに還元できている証であると考えています。

教頭 橋田 晶拓

未来で輝く北斗の子

正解なき問題の多いこの時代に

前号にて、「この冬より英語を学び直しています」と恥を忍んで紹介したところですが、実は早速壁に突き当たっています。一体どんな壁なのかというと...

私には、何人もの英語の先生がいます。世間では彼らのことを「英語系 YouTuber」と呼ぶそうです。その先生方お薦めの文法書や、本人執筆の書籍が私のテキストです。そのように複数の先生方の教鞭のおかげで、さぞ多様性に富んだ幅の広い学習ができるかと思いきや、ここで非常に困ったことが起こります。

先生 A は「基礎は大事。基礎文法を疎かにするからなかなか話せるようにならないんです」と言います。一方、先生 B は、「これは主語 + 動詞だから第1文型』なんて考えながら会話する人なんていない。文法をいちいち分かりにくく難しい言葉で考えるから、話せるようにならないんです」と言います。

...困りました。基礎文法をノートに一からまとめた矢先、それは無駄だと言われてしまいました。それ以降、ノートまとめなど進むはずがありません。

私は一体どうすればよいのでしょうか。おそらく、正しい答えはありません。というより、きっとどちらも正しいのです。結局は、私がどちらを選択するかという問題です。

このように、確たる正解がない場合にも、どのように進めていくか判断を迫られる場面があります。とても難しいことですが、今も、これからも、正解なき問題が増えると言われています。その際、何を基準とするのか、自ら答えを導き出すために、判断基準を創り定める力を子どもたちに育てていきます。

主幹教諭 才木 崇史

教えから学びへ

力試し

今週から、6年生を筆頭に、力試しが始まりました。力試し等のテストは、子どもたちがどれほど知識や技能を習得しているか、それらを活用して課題を解決する思考力、判断力、表現力等を身に付けているかを評価するものの一つです。ただ、この評価には、「成績をつける」以外にも様々な目的があります。例えば、「子どもへのフィードバックや適切な支援を行うため」、「子どもの学習改善をサポートするため」等です。これらは、教師にとっての目的ですが、『教えから学びへ』の実現のために、子どもにとっての目的もまた、重視していかなければなりません。子どもによる評価の目的、それは主に次のようなものです。

- ・自らの学習改善を図るため
- ・学習の成果を確かめるため
- ・自己の成長を認識するため

これらの目的に応じた評価を子ども自ら行うことにより、自らの現在地やこれから進んでいきたい方向性を見定め、自律した学びを進めていけるのです。

間もなく年度末を迎えます。1年間の締めくくり、次年度に向けての方向性を明らかにするための力試しとしていきます。

教務主任 松尾 勇哉